

人格を代表するのは顔・身体の中のどの部位か

—最期の別れで触れる場所—

Where is the representative position of personality in face or body?:
The part of the last touch at deathbed

中俣友子¹⁾, 平野大二郎²⁾, 阿部恒之¹⁾

Tomoko NAKAMATA¹⁾, Daijiro HIRANO²⁾ and Tsuneyuki ABE¹⁾

E-mail : abe1t@sal.tohoku.ac.jp

和文要旨

我々現代人は、人格が身体の一部に局在しているとは考えない。しかし、爪の先と顔を比較すれば、顔のほうが一層明瞭に人格を代表し、人格の核となっているように感じているのではないだろうか。本論では、最愛の人の「最期」に触れたい身体部位の特定を通じて、人格を代表する身体部位、いわば主観的な「人格の座」を探索することを目的として実験を行った。92名の参加者は、配偶者の最期を看取るという仮定のもと、最後に触れたいと思うところを、全身を対象として(髪・顔・手・胴・脚)、さらに顔だけを対象として(髪・額・頬・目・鼻・口・耳)、それぞれ一対比較法で選択した。また対照のため、ペットの最期を仮定して同様の比較を行った。その結果、配偶者の全身比較では手と顔、顔の中での比較では頬の選択率が有意に高かった。ペットの全身比較では頭と胴が、顔の中での比較では頭と頬が有意に多く選択された。すなわち、配偶者の人格は、手・顔(特に頬)、ペットの「人格」は頭と胴に坐すると認識されていることが示された。人の場合、人格の座は生前のコミュニケーションにおいて、触覚的・視覚的に、配偶者から自分に向けて働きかける部位であり、その働きかけに人格を見ていたと考えられる。

キーワード：人格の座, 身体意識, コミュニケーション, 身体接触

Keywords : Position of personality, Body image, Communication, Body touch

1. はじめに：心の座

三千年前に成立したとされる中国の『黄帝内経』では、肝臓は魂を、心臓は霊を、脾臓は思考を、肺は動物的精神を、腎臓は意思を支配するとみなし、古代ギリシャ人は不死の個性(プシケ)は脳に、肉体的な「呼吸する靈魂」(テュモス)は心臓に棲むと考えていたという[1]。心の在処、すなわち「心の座」が身体の中のどの部位にあるかという問いの歴史は長い。

1.1 素朴信念としての人格の座

デカルトが心身二元論を唱えた17世紀以降、脳を心の座とする解釈が一般化した[2]。近年に

おける脳のイメージング研究の隆盛は、心的機能を脳の特定位点と関連付けようとする関心に基づくものであり、その延長線上にあるといえよう。一方、ジェームズの感情理論[3]、ダマシオのソマティックマーカー仮説[4]は、身体からのフィードバック情報が感情・判断に影響していることを主張するものである。このような、心という機能が身体の中で営まれているのかという、心の生理学的基盤、いわば「生理学的心の座」に関する議論は、一旦、脳に収斂したのちに、身体全体に再拡散していると言えよう。

一方、心と身体の間接性については、私という人格の所在を身体の中に位置づけるかという観点

¹⁾ 東北大学大学院文学研究科, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University

²⁾ 東北大学文学部, Faculty of Arts and Letters, Tohoku University